

看護大学生が短期留学で体験したフィンランド看護教育におけるアクティブ・ラーニング

岡久玲子, 桑村由美, 高橋久美, 増矢幸子, 岸田佐智,
友竹正人, 谷岡哲也, Rozzano C. Locsin
徳島大学大学院医歯薬学研究部

1. はじめに

徳島大学医学部では、2011年より社会福祉先進国であるフィンランドのメトロポリア応用科学大学と学部間学術交流協定を締結している。本学から派遣される看護の大学生は、短期留学を通してフィンランドの学生や多国籍の留学生と一緒に英語での看護教育を受ける。授業は、ディスカッション形式のものが多く、グループワークやプレゼンテーションを取り入れたアクティブ・ラーニングを体験する。この体験は、英語のコミュニケーション能力の向上、比較文化学習、看護学の理解を深める機会となっている。

文部科学省によると、アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称¹⁾」と定義されている。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る¹⁾。看護学は実践の科学であり、その対象はあらゆるライフステージ、あらゆる健康レベルにある人々である。このことから、看護教育においても、このアクティブ・ラーニングは有用であるといえる。しかし、現在、看護専門科目の授業では、一部にグループワークやロールプレイなどを取り入れた演習を組み込んでいるものの、学生の主体的な学修への参加にまで至っていない現状がある。

本研究の目的は、看護大学生が短期留学で体験したフィンランド看護教育におけるアクティブ・ラーニングの内容と主体的な学修参加のための要因を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 対象: 2016年度にフィンランドのメトロポリア応用科学大学保健看護学部にて短期留学した看護学専攻2年生3名を対象とした。留学期間は、2016年8月中旬か

ら9月末の約40日間であった。

2) 学生が体験したアクティブ・ラーニング授業

領域: “Chronically disease”, 科目名: “Nursing of Chronically Ill Patients” である。

3) データ収集方法

留学から帰国して5日後の時期に、対象者3名に約1時間のグループインタビューを行った。インタビューガイドは以下の2点である。①アクティブ・ラーニングの内容(方法と工夫、学生の様子)、②アクティブ・ラーニングでの主体的な学修参加の要因(体験からの感想・学び、良い点や悪い点、グループワーク、プレゼンテーションの意味、日本の大学での授業との比較、日本で取り入れてほしいか、取り入れることは可能か)。

4) 分析方法

インタビュー内容を録音したICレコーダーのデータを逐語録にした。それを基に、アクティブ・ラーニングの内容について、方法、工夫点、学生の様子ごとに整理した。主体的な学修参加の要因については、内容分析を行った。

5) 倫理的配慮

調査に当たり、対象者に研究目的と方法について口頭で説明し、同意を得てから実施した。研究協力は任意であり、同意しない場合でも不利益はないことを説明した。インタビューの場所は、プライバシーの守られる個室とした。インタビュー内容をICレコーダーに録音することについて、事前に了解を得た。

3. 結果

1) アクティブ・ラーニングの内容

(1) 方法

授業では、糖尿病、心臓病、脳卒中、喘息・慢性閉塞性肺疾患、感染症(予防・対策)のテーマから、1グループにつき2つずつ担当し、グループワークを通して学生が教員に変わり授業準備、約45分間のプレゼ

ンテーションを行った。1回の授業は8時半から12時、13時から16時半などの集中講義であった。授業準備には1日とり、図書館やパソコン室で準備を進めた。クラスの学生数は全体で20名弱で、グループ編成は1グループ4～5名、英語とフィンランド語のグループがあった。教員は途中で補足説明を行い、授業後には看護ケアに関する講義を行った。事例を基にしたディスカッションを挟むときもあった。その後の流れとしては、シュミレーション演習、まとめテスト、関連分野の実習へと続く。

(2) 学生のプレゼンテーションの工夫

すべてのグループがパワーポイントを用い、テーマに沿った疾患の知識、予防・対策についての説明を行った。You-Tubeの動画を入れるグループが多かった。プレゼンテーション後には、ゲーム(スゴロクなど)やクイズ(Kahootなどの携帯電話のアプリ使用)、小テストなどにより、学びの確認を行った。クイズに解答し順位が一番のグループにお菓子を配るグループもあった。当日の配布資料はないが、授業後に作成した資料を共通のサイトにアップした。

(3) 学生の様子

学生が留学中に参加できた授業は計6回であった。授業準備について、学生Aのグループメンバーはグループワークの日までに自己学習をしてきており、準備当日は話し合いや資料作成がスムーズに進んだ。学生BとCのグループは自己学習をしてきておらず、準備の進行も遅くメンバー全員がピリピリした雰囲気であった。しかし、グループにはリーダー的なタイプの学生がおり、プレゼンテーションでは役割分担をして皆が活発に参加した。途中で気になることがあればどんどん質問して急にディスカッションが始まることもあった。

2) 主体的な学修参加の要因

①皆で授業をつくりあげる：「各々が役割をもち、みんなで作ろうという雰囲気があった」、「少人数で皆が主体的に参加し意見がまとまりやすい」、「一人ひとりが頑張って考えて授業がつくられている」、②皆の心の距離が近い：「先生や学生との距離が近く気軽に何でも聞いて主体的に楽しく参加できた」、「先生が褒めてくれるのがすごくいい。先生は何を言っても褒めてくれるし、間違ったことを言ってもせめない」、「クラスメ

イトは、何でも Good と受け入れてくれる」、「英語がつかない私たちを、皆、普通にフォローしてくれる」、「英語には敬語がないから先生ともフランクに話せる」、③互いのことを理解しあう：「各々の中高生時代の経験や母国の文化を紹介しながらディスカッションできた」、「互いの国の看護について話し合った。日本では患者さんとの距離は遠いが、看護が丁寧という意見があった」、「積極的に発言できるのは国民性も関係していると思う」、「多国籍の看護師が働く病院では、皆が気持ちよく仕事できるよう共通言語を使う」、④得意なところを教えあう：「担当したところに詳しくなるので後で友だち同士で教えあえる」、「自分の詳しいところが分かれているのでわからない時には担当したグループの友だちに聞ける」、⑤メンバーの一員として自己学習を行う：「確実に自己学習の時間が増える」、「明確な目的をもち留学している他国の学生はよく勉強する」、「日本では部活やバイトがあり自己学習に時間をかけることが難しいと思う」。

4. 考察

学生による授業は、知識の伝達だけでなく、学生の関心を引き、学びの定着を図る工夫がなされていた。少人数制であること、明確な留学目的をもつ多国籍の学生が集まり、互いの経験、文化、看護を基にしたディスカッションを行い、皆で授業をつくりあげていく過程が、主体的な学修参加を可能にすると考えられた。

5. 結論

フィンランドの看護教育におけるアクティブ・ラーニングでは、学生が主体的に学ぶことができていた。その要因として、①皆で授業をつくりあげる、②皆の心の距離が近い、③互いのことを理解しあう、④得意なところを教えあう、⑤メンバーの一員として自己学習を行う、以上5つが挙げられた。

文献

- 1) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)、用語集、P.37、2012
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
 (2016年10月15日アクセス)